

地域クリエイター の履歴書

今回の舞台

●札幌市

『企業の将来はトップで99%が決まる』とは船井幸雄の言である。企業体と同様、地域社会にもカリスマと言えるリーダーが存在する。その彼のリーダーシップこそ地域社会の未来を99%まで左右すると言えそうだ。地域クリエイター達の原点にフォーカスし、彼らが成し遂げた地域活性化の真髓に迫る。

インタビュー/文 柘尾 圭亮

船井総研入社後、地域創造・活性化チームに志願し、創設に情熱を注ぐ。現在は、地域再生の「行脚(あんぎゃ)100」を実践し、成功事例を求めて全国を渡り歩く武者修行中。
連絡先: keisuketochib@funaiscken.co.jp

“衝撃的な出会い”と“直感”が生んだ 札幌200万人祭り「YOSAKOIソーラン」

CREATOR'S PROFILE



氏名

はせがわ たけし

長谷川 岳

住所

〒060-0001 札幌市 中央区北1条西2丁目
経済センタービル7F

趣味

登山、ピアノ、水泳、書道(4段)

年代	出来事
1971.02	愛知県 春日井市 に生まれる
1990.04	北海道大学 入学
1991.06	母親がガンを宣告される
1991.07	母親の看病の為、高知に赴く
1991.08	高知のよさこい祭りと出会う
1991.12	学生委員会を組織、活動を開始
1992.06	第一回よさこいソーラン祭りを実施
1994.03	北海道大学 経済学部 経営学科 卒業
1994	普及振興会を設立、祭りの普及に努める
1998.11	組織委員会の設立、専務理事に就任
2001.05	NPO系企業(株)yosanetを設立し取締役を兼務





毎年、札幌で200万人の人を熱狂させるダンスの祭典“YOSAKOIソーラン祭り”のクリエイター“長谷川岳氏”に焦点をあてる。12年で日本有数の規模となったこの祭りの立役者である長谷川岳氏を突き動かした原動力とは？ 地域クリエイターのあるべき姿に迫る。

始まりは直感力、そして希望

YOSAKOIソーラン祭りは、その名が示すとおり、高知発祥の“よさこい祭り”に北海道の“ソーラン節”を加えて完成するユニークな祭りである。しかしこの祭りの立役者“長谷川岳”氏の出身は北海道でも高知でもない愛知県。何が彼をそこまで動かしたのか。何が始まりであったのか。その答えは、若さと直感力、そして母親に対する熱い想いであった。

栃尾 そもそも愛知県出身の長谷川さんが北海道の“祭り”にそこまで情熱を注ぐことができた要因は何だったのですか。

長谷川 “祭り”を思い立ったのは、大学二年生の時でした。当時、母親がガンで入院することになり、私も高知の病院に看病で訪れていました。しかし三人兄弟の中で、医者である兄が治療、姉が看病という重要な役割を果たしているのに対し、私にはこれといった役割がありませんでした。ちょうど、何かに若いエネルギーをぶつけたい時期でもありましたし、今思い返せば、いつもエネルギーをぶつけることができる“何か”を探していたのだと思います。

栃尾 そんな感性が研ぎ澄まされた時期に会ったのが高知

のよさこい祭りだったんですね。

長谷川 そうです。その出会いは“直感”に近いものでした。出会った瞬間に“鳥肌が立つほどの”の強い衝撃があったことを今でも思い出します。同時に死病と戦う母親がよさこい祭りだけは欠かさずTVで見て自らを元気付けていた姿にも心を打たれました。自分の体で感じた直感にこの母親の姿が加わったことで、よさこい祭りをもっと広く知って欲しいという思いは確信に変わりました。考えてみれば、当時の自分が母親に対して与えられるのは“希望”だけでした。残念ながら母は既にこの世にいないのですが、この“希望”に自分が体験した感動を他の人に知ってもらいたいという強い思いが重なったからこそ始められたのだと思います。

栃尾 それでご自分の大学がある北海道に広げようと考えられたわけですね。しかしなぜ北海道だったのでしょうか。

長谷川 ご存じの通り、北海道は非常に自然が厳しいところです。だからこそ、人には助け合いの精神が生まれ、強い連帯感があるのです。しかし同時に他の土地に比べて積極的な行動は少ない。つまりここでは、人が積極的に動くのではなく、自然が作った秩序に人が従うのです。祭りにしても同じです。どこか冷めていて人が本当に熱中しない。しかし私は北海道に存在する強い連帯感によさこい祭りの熱気を加えれば、私が体感した感動を再現できると考えました。

地域クリエイターの条件 “直感を信じる力”

自らの直感を信じ、突き動かされるように進んできた長谷

川氏。しかしその行動に迷いはなかったのか。より深く原点に近づくと、そこに同氏の素直かつ明快な行動哲学を垣間見ることができる。あくまでまわりの人を幸せにしたいという思いと、そのための三つの“行動条件”。三つの条件を守り続ける強さが現在の“祭り”の姿にいきついたのではないだろうか。そしてこの行動哲学が、同氏の組織運営の手法“リーダー養成”にも共通する。同氏の原点が様々な地域・分野で人々が幸せになることにあったからこそ、その問題解決手法は常に自分が中心になり続けるものではなく、様々な人が“リーダー”として“人財”として育っていくことになったのではないだろうか。

枋尾 突然、“祭り”を実行するという決断に、不安や疑問はなかったのですか。

長谷川 ありました。しかし、これは私の哲学ですが“頭で考えるよりも体で感じた直感を信じる”という判断基準があります。そして感じた直感を

それは明るい話か？

(誰かを元気にするか)

それは誰かの足を引っ張るか？

(誰かに迷惑をかけてしまうか)

それは前向きな話か？

(将来的なビジョンにつながるか)

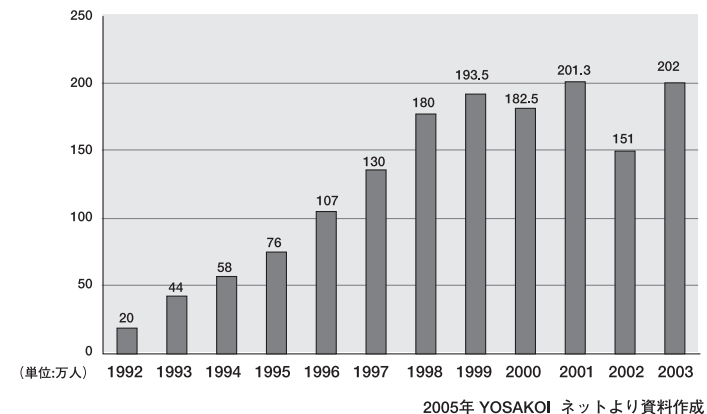
という3つの基準で判断して、ポジティブな答えができれば実行することにしています。地域の知識や運営のノウハウも重要ですが、そういうものは後から追加できます。大切なことは、自分が直感したことを信じることに尽きると思います。例えば“祭り”の場合は、日本で最も若い二人の知事(当時の高知県知事と北海道知事)の対談や、北海道男爵芋の起源である川田男爵が高知県出身だった話など二つの土地をつなげる話は非常に多く、後日様々なネットワーク形成につながっています。

枋尾 実際に、運営をしていく上で長谷川さんが最も注力された問題解決はどのようなものですか。

長谷川 一言では言い切れませんが、主に二つに絞られます。第一に対外的に祭りをアピールし、できるだけ多くの方に祭りを理解し、受け入れてもらうこと。第二に対内的に自分で考え行動する組織を作るために、リーダーを養成することです。

まず対外的な試みからお話しましょう。祭りが拡大していくと、どうしても反対される住民の方が出てきます。リオのカーニバルでもそうですが、ダンスや祭りに興味がない人には、祭りは迷惑でしかありません。リオでは、多くの上流階級の人間はカーニバルの最中は海外に休暇に出かけてしまうといえます。ですから“祭り”の拡大と共に、迷惑だと感じている方に納得してもらえるように心がけていました。例えば、小学校や中学校に無料の招待を行ったり、日本ハムファイターズの公式応援歌を創作したりと、祭りやダンスの良さ

YOSAKOIソーラン祭り 拡大の軌跡



をわかってもらえるよう努力し、成果を上げています。

また“祭り”による渋滞や混雑で経済活動に支障が出る、という方もいらっしゃいます。そういう方には、祭りの仕組み自体を変えて、様々な形で祭りに参加してもらえるよう努力しています。例えば、最近の祭りでは“北のフードパーク”を設置し、飲食関係の方に北海道の食べ物を存分に提供していただくという参加形態を創設しました。このように“祭り”への参加形態を多様化し利益を共有していただく方法で、これから多くの方が参加できる祭りを模索していきます。

次に対内的な試みですが、自分で考え動く組織を作るために、リーダー教育を行っています。これは“祭り”のためでもあります。北海道や日本を元気にするためにも必要だと考えています。ご存じの通り、現在の“祭り”には330のチーム、またボランティアを含む運営組織に、500を超えるリーダーが存在します。このリーダー達が“祭り”を通してリーダーシップを学び、その能力を他の空間(経済や政治、地域コミュニティなど)で発揮できれば地域そして日本全体が活性化すると思います。そのために、現在“祭り”では、全てのリーダーが集まり切磋琢磨する“YOSAKOIソーラン祭り参加者フォーラム”を毎年開催しています。また最近では“祭り”の運営ルールの作成・運営にリーダーが参加する方式を採用し始めました。もちろん決定までに時間がかかりますし、議論が白熱しすぎることもあります。しかしそこで培われたリーダーシップは必ず有益なものになると私は信じています。

アマチュアリズムからプロフェッショナルリズムへの飛躍

明確な行動哲学にもとづき、若き地域リーダーを養成し続ける長谷川氏。現在の目標は、“量的な拡大”から“質的な深化”に移りつつある。そしてこの目標のためにこそ、必要なことこそ地域・分野で育ってきたリーダー達を中心とした“アマチュアからプロフェッショナルへの飛躍”がある。

長谷川 これまでの10年間“祭り”は勢いによって大きく拡大しました。ですから、今後は同じ10年間をかけて、祭りとしての質を高めていきたいと考えています。先ほどの地域リーダーの創出についてもそうですが、これからはアマチュアリズムからプロフェッショナリズムへの進化を図っていくつもりです。例えば“YOSAKOIソーランアカデミー”という音楽とダンスについての研修機会を創設し、より人々に訴えかけることができる質の高い音楽やダンスを創出していくつもりです。

板尾 文化力を得た“祭り”が目指す具体的な目標などがありますか。

長谷川 高知のよさこい祭りは、30万人の人口で130チーム

が参加しています。人口180万の札幌市ならば720チームが参加できる計算になります。もちろん、これは理論値ですが、それくらい質の高い、地域全体を巻き込んだ祭りを作り上げていきたいですね。

【まとめ】

長谷川氏の行動を支え“祭り”を拡大・深化させてきた原点は、“直感”を信じることの重要性と独自の行動哲学である”三条件“であろう。考えてみれば優れた企業の創業エピソードも、始まりは直感を信じ、周りを幸せにしようとして立ち上がるカリスマの姿がそこにあったのではないか。地域の知識や運営のノウハウは地域クリエイターが掲げる旗印が魅力的であれば自然に集まってくる。政治・経済の分野を問わず、この二つの要素は全てのクリエイターたる者に共通する必須要素である。

